

１．はじめに

このところイギリスに凝っている。特に理由はない。図書館でイギリス刊行の図説などを見ると日本の事項の紹介がある。武具でも騎士の鎧と並んで日本のサムライの鎧が例示してある。日本の家は「家紋」がある。西欧にも「エンブレム」がある。なんとなく似ている。

中世西欧の戦闘では、フランス軍やドイツ軍では、弩弓兵（crossbow）が主体だったが、イギリス軍は、ヨーマン出身の長弓兵（longbow）が活躍している。長弓兵の養成には、長い訓練期間が必要らしく、元寇でも射程距離の長い弓を持った日本武士団は短弓主体の元軍に善戦したという説もある。こうした源平から戦国にかけての日本の武士は、馬上長弓兵を主体にして、騎馬武者一人に家の子郎党５、６人付いて戦場に赴いていたようだ。

中世、洋の東西で騎士やサムライが、名誉を重んじ、意地を張って、今流に言えば、「ベタに」、「マッちょに」生きていた背景を土地から考えてみた。

２．謡曲「鉢の木」の世界

中世日本の武士の農場経営はというと、関東では谷津、谷戸、あるいは谷地などとよばれる丘陵部の縁の小さな谷間の田圃を耕していたと考えてよさそうである。今で言う「里山」である。

谷戸の田圃で米をつくり、丘は畠や薪炭林である。水のコントロールが比較的容易で、中世では生産活動の拠点であったようだ（沖積平野が開墾されるのは、農民層を大量に動員できるようになる戦国時代以降のようである）。

関西出身で旧上総国某村の豪農のセガレと結婚した知人女性は、「谷戸ごとにおっきな農家があつて、みんな屋号を持ってるのよ」と驚いていた。「一所懸命」の「一所」のイメージが何となく湧いてくる気がする。

一所懸命のサムライの生き方から、謡曲「鉢の木」を思い出した。年配の方ならご存知と思うが、若い方は「・・・？」かもしれないので、ちょっと紹介する。時代は、１３世紀末である。

「ある大雪の日、旅の僧が上野国佐野で貧しげな民家に泊る。薪がないので盆栽三鉢の木を燃してもてなした主人の身の上は、かつては付近の佐野庄三十余郷の領主御家人佐野常世だが、一族たちに所領を奪われ落ちぶれていた。しかし、もし幕府に一大事がおこれば、ただちに『いざ鎌倉』とかけつける決意を語る。

やがて幕府から、緊急動員令が下る。関東八か国の御家人たちがかけつける中に、常世もいた。その後、雪の日の旅の僧が、前執権の北条時頼であることがわかる。時頼は常世が先日の約束を果たしたことをほめ、旧領を常世に返し与え、薪にされた三鉢の盆栽の梅・桜・松にちなんで加賀国梅田庄、越中国桜井庄、上野国松井田庄の三つの庄園を新たに恩賞として与えた。」というお話である。

この謡曲は世阿弥の父、観阿弥清次の作ともいわれ、１６世紀初めまでにはつくられ、上演されていた能の名作だそうである。この「郷」というのが、谷戸に当たるのではないだろうか・・・。

３．戯曲「ヘンリー４世」の世界

さて、そこで、鎌倉武士佐野常世に対抗するイギリス貴族の話はないかと探したところ、１６世紀末のシェイクスピア「ヘンリー４世」に行き当たった。そこに面白い会話があったので紹介したい。

作品の舞台は、１４世紀末から１５世紀初め、ヘンリー４世の時代、王位継承時の支持者パーシー一族らを冷遇したことで、ホットスパーことヘンリー・パーシーらは、反乱を計画する。ホットスパーらの陰謀計画と領地の分け取りの場面を「ヘンリー４世 １部３幕第１場」から、引用する。「

マーチ伯爵エドモンド・モーテイマー：いずれもここ

ろよく確約してくれた、味方として頼もしい連中ばかりだ、まずは幸先がいいぞ。

ノーサンバランド伯爵ホットスパー：モーティマー、それにグレンダワー、二人ともすわったらどうだ、叔父上もどうか。あ、しまった、なんということだ！地図を忘れてきた。

ダグラス伯爵 オーウェン・グレンダワー：いや、心配するな、ここにある。・・・ 中略 ・・・
グレンダワー：さあ、地図だ、それぞれの領地を分けることにしよう。三人で交わした取り決めに従ってよかろうな？

モーティマー：すでに副監督が三人の領土を分けてくださった、どこから見ても公平だと思う。それによれば、まず、イングランド、つまりトレント河からセヴァン河のこの線まで、東南部一帯はおれのものとする。

次に、ウェールズ、つまりセヴァン河から西に広がるこの地帯、この肥沃な土地はすべてオーウェン・グレンダワーのものだ。

パーシー、きみはトレント河の北に横たわるこの一帯を領有するわけだ。・・・明日の朝は、出陣だぞ、

ホットスパー：どうもおれの領分は、バートンから北とのことだが、きみたちのとくらべて同等とはおもわれないがな。見ろ、ここでトレント河がこちら側に食い込んで、おれの領土の一等地を、このように大きく半月形に削りとっているではないか、これではひどすぎる。・・・（下線部引用者）」

こうして、反乱前に領地分割で大揉めの反乱軍は、国王の長男ハル（ヘンリー5 世）らの活躍で鎮圧されてしまう。

歴史的イベントだそうだが、ここでの会話に「地図」が出てくる。実は、古代ローマの伝統がありながら、イギリスでは中世には地図が殆ど使用されなくなり、1530年まで国王、国家のための地図製作はなかったそうである。1575年にイングランドで初めて荘園図が作成されたのだそうだ。シェイクスピアの時代には、領地の統治のため地図が活用される時代になっていたようだ。

日本でも、古代の班田収受の時代に地図が作られ、長い間、国司の引継ぎ資料にもなっていたが、やは

り中世には作られなくなった。武士が直接領地を眼で見て支配する時代には、地図は必要なかったからだ。それが、戦国時代も後半になってくると地図が再び作られるようになり、太閤検地では全国の検地帳と地図が作られたのである。

イギリスは僅かな貴族や郷紳層が、国土の大部分を所有する大土地所有制である。これは、12世紀にノルマンディー公ウィリアムが、サクソン貴族を征服して土地を取り上げ、親族、家臣に分配したからである。歴史上、他民族に征服されたことのない日本では、海外のような大土地所有制は出現しなかった。関東では谷戸毎に独立自衛農民というか、武装開拓民というべきか、とにかく武士が土地を所有していたが、太閤検地と刀狩により、武士と農民が分離して以来、零細土地所有者主体の制度になったのだろう。

4. おわりに

他国の制度をとにかくいうつもりはないが、大土地所有制の「大」のスケールが、一桁、二桁違う感じがする。そこで、以前、マレーシアの都市計画局が、工業団地を計画していたときのことを思い出した。**1400ha** のゴム園から **1000ha** を買収して造成しようとしたら、残った分では経営が成り立たないといわれて、結局、全部買収して、**1400ha** の工業団地を作ったのである。日本人としては「へーッ」としかいいようがなかった。

参考文献等)

小田島雄志訳「ヘンリー4世」、シェイクスピア全集Ⅱ、白水社、1985年

石井進「もののふの都 鎌倉と北条氏」、別冊歴史読本30、新人物往来社、1999年

金田章裕、「古地図からみた古代日本」、中央公論新社、1999年

<http://www015.upp.so-net.ne.jp/gofukakusa/index.htm>

<http://www.sol.dti.ne.jp/~takeshu/index.html>。

<http://ww1.m78.com/betsumiya-87.82.150.220.ap.yournet.ne.jp> - 340 hit(s)